

鑑賞の手引

《南蛮屏風》^{なんばんびょうぶ} 江戸時代初期(17世紀前半)／紙本金地着色^{しほんきんぢやくしやく}／六曲一双^{ろくきよくいっそう}／堺市博物館^{さかいしはくぶつかん}



■ 作品について

この作品は、日本の港に来航するポルトガルの商人と、それを迎えるイエズス会のキリスト教宣教師を描いた屏風です。ポルトガルとの交易の様子を描いたこうした屏風を「南蛮屏風」とよび、16世紀から17世紀にかけて制作されました。異国風の主題を描きながらも、日本の風俗を描いた伝統的な大和絵の技法が用いられています。

■ 鑑賞のポイント

① 描かれた情景を細かくみてみましょう。左隻(させき)には、入港する船と荷揚げの風景、右隻(うせき)には、迎えるイエズス会宣教師や日本の商人らが描かれています。画面全体に用いられた金色の雲は、装飾的な効果のみならず、場面の区切りや省略のために用いられています。ポルトガル商人たちの服装や風貌に注目してみましょう。服には、異国風の文様が、絵具を盛り上げた繊細な表現で描かれています。

② 屏風という形式にも着目してみましょう。屏風は、風や視界をさえぎるための部屋の仕切りとして使われますが、大画面の装飾を楽しむことができるため、室内装飾として重宝されました。たたむとコンパクトに収納することができることも利点で、季節や目的によって、異なる作品と入れ替えて楽しむことができます。実際に室内で用いられる様子を想像してみましょう。

■ もっと知りたい人のために(三溪と桃山史料)

三溪は、自らの自邸に古建築などを移築し、三溪園を造園しました。なかでも、大正6年に移築した「臨春閣」は、当時は「桃山御殿」と呼ばれ、かつて豊臣秀吉が建てた邸宅・城郭として知られる聚楽第(じゅらくだい)の遺構と考えられていました。この頃、三溪は秀吉関係の史料を集中して購入しました。南蛮屏風も、そのひとつと考えられます。